



「版画誌から板壁画へ - 版画の限界を超えて」

青森県立美術館

棟方志功記念館の作品を紹介

青森県立美術館で2月16日(日)まで開催中の「コレクション展 2024-1」にて、棟方志功展示室ほかで「版画誌から板壁画へ - 版画の限界を超えて」が開かれています。志功が油彩画から木版画へ転じた当初の小さな作品群から、版木を組み合わせ壁を覆うサイズの大規模な作品を生み出すに至った足跡をたどることができます。

展示の中心は、2024年3月に惜しまれて閉館した青森市の「棟方志功記念館」から青森県立美術館へ移された《二菩薩釈迦十大弟子》(写真①)、《華嚴譜》(写真②)といった作品です。

記念館の建物や空間と一体化して存在感を放っていた数々の版画が、新たな居場所を得て、創作のプロセスを力強く示す版木とともに新しい横顔を見せています。

圧巻は《大世界の柵 乾-神々より人類へ》(写真③)



です。縦3枚×横24枚、計72枚の版木を組み合わせ制作され、1970年の大阪万国博覧会に出展されました。高度成長期の空気を象徴する作品ともいえます。

一方、志功が版画を手掛けるようになって間もない時期の《歌舞伎版画勸進帳》(写真④)などの小品も味わいを感じさせます。

このほか、愛用したニコンの50mm7倍の防水双眼鏡、「いつか誰かに弾いてもらえる日」を楽しみに、自宅に置いていたスタインウェイのグランドピアノ(写真⑤)

といった品々も展示され、創作を取り巻く志功の日常の息づかいも伝わってきます。

展示を担当した一般財団法人棟方志功記念館の竹浪彩子学芸員は「青森県立美術館ならではの、大きさを存分に生かせる展示から、志功作品の新しい魅力に触れていただければ」と話していました。

また、コレクション展の特集展示「昭和の初めの学び舎から」では、青森市の版画家・関野準一郎が志功を描いた作品の摺り重ね見本と版木も披露されていて、併せてみると版画制作の世界への理解が深まります。

入場料は一般700円、大学生400円、高校生以下は無料です。なお、期間中の休館日は1月27日、2月10日です。



青森西高校「青西おもてなし隊」がゆく⑥3

JR東日本盛岡支社長 青森西高校に感謝状

JR東日本は東北新幹線全線開通・新青森駅開業14周年に当たる12月4日、同駅における青森県立青森西高等学校のイベント協力などに対し、大森健史・盛岡支社長名の感謝状を贈りました。

青森西高校は2010年12月4日の新青森駅開業以降、「青西おもてなし隊」を中心に、書道部、華道部などが新青森駅でのおもてなし活動やイベント、生け花飾り付けに協力しています。JR東日本は例年、青森営業統括センター所長名で同校に感謝状を贈ってききましたが、今

回は多年にわたる活動をたたえ、支社長名での贈呈となりました。

青森駅長を兼ねる青森営業統括センターの角谷公博所長、新青森駅の澤村郁子駅長が、同校を訪れ、おもてなし隊長に就任したばかりの工藤桜子さん(2年)に感謝状を手渡しました。

続いて、角谷所長らは岡一仁校長、兜森勝一教頭、おもてなし隊顧問の清野耕司教諭と「冬に雪だるまやかまくらで、観光客をもてなせないか」といった話題をめぐ



り懇談しました。また、工藤さんは津軽の伝統工芸「こぎん刺し」の制作に挑戦する予定だと伝え、「制作をおもてなし隊の活動に結びつけ、青森の魅力発信に活用したい」と抱負を語りました。

☆写真は左から澤村駅長、角谷所長、工藤さん、岡校長、兜森教頭、清野教諭

創刊7年目 今号から隔月刊化

当ニュースレター「はっしん！新青森」は創刊7年目を迎える今年、紙面制作体制の見直しに伴い、月刊から隔月刊へ移行することになりました。次号第64号は3月20日に刊行予定です。Facebookページ等によるオンラインでの情報発信を、今まで以上に充実させて参ります。引き続き、よろしくお願い申し上げます。(青森大学社会学部・榎引素夫)

三内丸山遺跡 縄文の「衣食住」 解き明かす 企画展

特別史跡・三内丸山遺跡で2025年3月9日(日)まで、企画展「衣食住から探る縄文人の暮らし」が開かれています。遺跡から出土した多様な動物の骨・角と加工品、魚の骨、さまざまな種子、木や樹皮を利用した道具を通じて、縄文の暮らしそのものの実像に迫る構成となっています。本号では第61号に続き、特に注目される遺物について紹介します。

遺跡からはツキノワグマ、ニホンジカ、イノシシ、ノウサギなど多くの動物の骨が見つっています。その中で、表面に細かな浅い傷跡が残る獣の骨が…。調べてみると、傷の特徴がネズミの歯形と一致し、当時のムラにネズミが住み着いていたことが分かったといえます。どこで、どんな状態でかじられたのでしょうか？ネズミそのものの骨(5,900～5,600年前)も見つかり

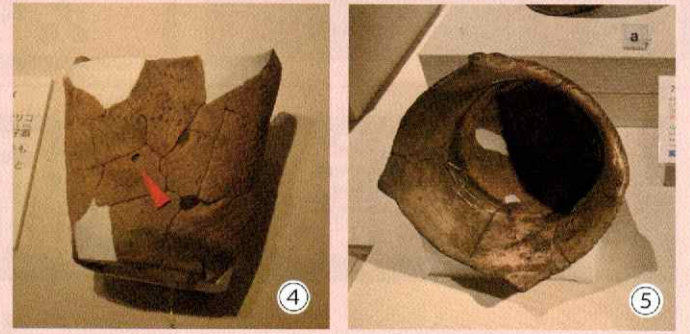


ます(写真①)。

また、動物の骨を観察すると、解体時に石器の鋭い刃でつけられた傷跡を確認できることがあります。会場には5,900～5,600年前の、解体痕のあるシカの骨が展示され、獲物を解体した人々の手つきやまなざしまで想像されます(写真②)。

そもそも、石器はどれぐらいの切れ味なのか…？それを試せるコーナーもあります。動物の皮を切ってみると、ナイフのようにすっぱりとはいきませんが、コツが分かれば次第に上手に切れるようになります(写真③)。

三内丸山遺跡ではクリやクルミ、トチノキなど縄文時代を代表する木の実に加え、ニフトコ、キイチゴ、ヤマブドウ、サルナシなどの果実が出土しています。また、小さな穴が空いた土器が見つかり、埋まっていた物の正体確かめるためにシリコンで穴を埋め、埋まっていた物のレプリカを作りました。そして電子顕微鏡で観察した結果、この穴はアズキまたはヤブツルアズキの圧痕であることが分かりました(写真④)。土器を製作する過



程で埋まったのでしょうか。なお、遺跡からは、アズキの仲間も見つっています。

土器にはさまざまな用途が考えられますが、鍋として煮炊きに使用された痕跡のある土器もよく発見されています。企画展では一例として、5,300～4,200年前の土器が展示されています(写真⑤)。こびりついた炭化物を分析することで、調理されていた食品の種類が分かることもあるそうです。

展示ではこのほか、復元された漁具や衣類、竪穴建物の模型、4,600～4,400年前の木柱などが並び、自然の恵みをたくみに生かしながら暮らしていた人々のたくましい姿が想像できます。

企画展は遺跡を含む常設展観覧料で見学でき、一般410円、高校・大学生200円、中学生以下は無料です。

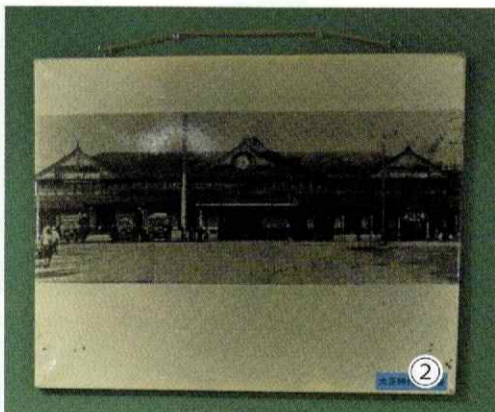
青森駅舎 第2・3代の姿 「鉄道まつり」の展示から

青森駅前には2024年に新しい駅ビル「&LOVINA(アンドラビナ)」がオープンし、青森駅舎の建て替えをはじめとする駅一帯のリニューアルが完了しました。長く鉄道と青函連絡船の拠点として歴史を刻んできた青森市にとって、新たな1ページが開いた年となりました。同年秋、駅前の青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸な

どで開かれた「鉄道まつり」展示から、青森駅の第2代、第3代駅舎を紹介します。

東京青森県人会の会報「東京と青森」の連載「青森県史の窓」第160回(2019年1月号)によると、初代の青森駅舎は1891(明治24)年、日本鉄道(後の国鉄・東北本線)上野-青森間の全通時に開業しました。やがて、手狭になったことから、駅舎が新築拡大され、1906(明治39)年に落成しました(写真①②)。

その後、1908(明治41)年に青函連絡船が就航、1925(大正14)年には貨車の航送が始まり、青森駅構内が改築拡



大されました。一方で駅舎が老朽化し、連絡船との乗り継ぎにも不便を来すようになったため、1935(昭和10)年に第3代駅舎が開業しました(写真③)。この駅舎は1945(昭和20)年の青森空襲を生き延び、復興の希望の拠り所となりました。

この駅舎も1959(昭和34)年に第4代駅舎にバトンタッチし、さらに2021(令和3)年、現在の第5代駅舎に改築されました。

三内丸山遺跡センター

見学時間 9:00～17:00(入場は閉館の30分前まで)
 休館日 毎月第4月曜日(祝日の場合は翌日)、12月30日～1月1日
 観覧料 一般410円(330円)/高校・大学生等200円(160円)/中学生以下無料
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※特別展は別料金。展示内容により変更する場合があります。
 ※個人観覧者は、青森県立美術館のチケット表示で割引特典あり。
 (詳しくは各施設のチケットカウンターまでお問合せください。)

お問合せ 〒038-0031 青森市三内丸山305
 TEL.017-766-8282 / FAX.017-766-2365
 URL https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp

縄文⇄芸術

三内丸山遺跡センター 徒歩約10分 青森県立美術館

青森県立美術館

開館時間 9:30～17:00(入場は16:30まで)
 休館日 毎月第2、第4月曜日(祝日の場合はその翌日) 年末年始(12月26日～1月1日)
 ※企画展開催時、展示替等により変更する場合があります
 観覧料 一般700円(560円)/大学生400円(320円)/高校生以下無料
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※心身に障がいのある方と付添者1名は無料
 ※企画展は別料金。

お問合せ 〒038-0021 青森市安田字近野185
 TEL.017-783-3000 / FAX.017-783-5244
 URL https://www.aomori-museum.jp

新青森駅 → 三内丸山遺跡センター: 循環バス「ねぶたん号」(東口) 18分・300円、タクシー(南口) 約10分、徒歩約30分
 → 青森県立美術館: 「ねぶたん号」(東口) 約11分・300円、タクシー(南口) 約10分、徒歩約40分

Facebook ページ Instagram アカウント

<ネット情報>
 Facebook ページとInstagram アカウントを開設し、独自の記事・情報を掲載しています。ご意見をお寄せ

下さい。また、PDF版を青森大学社会連携センターのFacebook ページに掲載しています。いずれも、右側のQRコードからご覧いただけます。
 ☆このニュースレターは、青森大学社会学部・榎引研究室が企画・制作し、文責を負っています。お問い合わせ、ご意見等は下記連絡先へお願いします。

〒030-0943 青森市幸畑 2-3-1 青森大学社会学部
 榎引素夫 電話 017-738-2001 内線 731
 shin-aomori@aomori-u.ac.jp

FB ページ Instagram 青森大学社会連携センター